

## ● 関西

## 門田 展弥

2025年は大阪・関西万博が開催されたこともあり、関西のクラシック界は何かと賑やかであった。ただ、半世紀以上も前に開催されたEXPO'70の際に巻き起こったあの現代音楽の旋風を知る者にとっては、些か物足りなくもあった。とはいえ、万博開催記念となった「大阪4オケ」では、大フィル、関西フィル、大響、日本センチュリーが、それぞれ、武満徹、萩森英明、外山雄三、久石譲の作品を演奏。思いがけず、日本音楽界がたどってきた50有余年の変遷を回顧する機会となった。

では、これより三つの視点に分けて話題をピックアップする。まず、オーケストラ。9月、大阪交響楽団が創立45周年記念第282回定期演奏会を開催。常任指揮者/山下一史の指揮によって、ヴェルディの『レクイエム』を演奏。同団は、1980年に大阪シンフォニカーとして産声を上げ、初代音楽監督・常任指揮者は小泉ひろしであった。2000年、本拠地を堺に移し、2010年、現在の名称となった。

大阪フィルハーモニー交響楽団は4月の第587回定期において、エルガーのオラトリオ『ゲロンティアスの夢』を上演。これまで、イギリス音楽の紹介に努めてきた音楽監督/尾高忠明が満を持してこの大作に臨んだ。エルガーはイギリスの国民的作曲家であり、イギリス人にとってはブリテンよりずっと身近な存在。ちなみに、このコンサートは「アフニス エンブレム」に選ばれている。9月、それとは対照的な、尾高&大フィルによる2度目の「ベートーヴェン・チクルス～原点にして頂点～(全5回)」がスタート。尾高の並々ならぬ意気込みが伝わってきた。

関西フィルハーモニー管弦楽団は、ホールでのコンサート以外に多くの学校巡回公演(芸術鑑賞会)を行っており、その活動は本拠を置く門真はもとより、兵庫県や滋賀県など大阪府外の小中学校にも及んでいる。日常、オーケストラの演奏を聴く機会のない子ども達にとって、貴重な体験となっているに違いない。たとえ、一生に一度であろうとも、その記憶は後年まで残るのではないだろうか。首席客演指揮者/鈴木優人が3年計画で始めた「ベートーヴェン・ヒストリー(全9回)」も興味深い。ピアノ協奏曲の演奏にフォルテピアノを用いるという試みには、少なからず驚かされた。往時の音色を再現しようというアイデアはもちろん理解できるが、モダン楽器とのマッチングがどうなるか、最後まで見届ける必要がある。

3月21日、日本センチュリー交響楽団と首席指揮者/飯森範親による「ハイドン・マラソン」がとうとう完結した。10年の歳月と38回のコンサートによって、ハイドンの交響曲全104曲を演奏ならびに録音するという壮大極まりないプロジェクトであった。世界でも稀にみる、少々「向こうみず」な挑戦を完遂させた飯森と楽団員の集中力と持続力には、心より敬意を表する。

次はホール。京都コンサートホールが開館30周年を迎え、種々の記念コンサートを開催した。スイス・ロマン管弦楽団、MARTHA ARGERICH & SINFONIA VARSOVIA、内田光子ピアノ・リサイタル、ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団、京都市交響楽団「広上淳一×ローマ三部作」、或いはKyoto Music Caravan 2025等々、まこと多彩な内容であった。

兵庫県立芸術文化センターは開館20周年。こちらも、トーンキョウストラー管弦楽団やバーミンガム市交響楽団等が来演。同センターでは、開館から今日に至るまで、兵庫芸術文化センター管弦楽団をはじめとする主要公演の盛況が持続している。集客の難しいクラシック界において、ここだけは完全に別世界の感がある。

1973年に開館した神戸文化ホールは「開館50周年シリーズ」最後の年となった。3年に亘り、様々な催しが開かれたが、11月に行われた神戸市室内管弦楽団と神戸市混声合唱団による合同定期「ベートーヴェン・ダブルビル」は、そのフィナーレを飾るに相応しい空前のプロジェクトであった。それは、『ミサ・ソレムニス』と『第九』を2日連続で演奏するというもの。両曲には密接な繋がりがあり、ミサがまだ残っている耳で第九を聴く事によって、「ベートーヴェンの脳裡を追体験」してほしいという同室内管弦楽団音楽監督/鈴木秀美の熱い思いが込められていた。そして、もう一つ、4年に一度、神戸が世界に向け発信する「神戸国際フルートコンクール」が開催された。今回は第11回。E.パコをはじめ、多くの世界的奏者がここから巣立っていった事は、もう繰り返すに及ぶまい。1985年の第1回から実に40年、今や、その存在意義は不動のものとなっている。

中小のホールも、ユニークな企画で関西の底力を見せてくれた。その筆頭は、住友生命いずみホール。1月、「メンデルスゾーン 光のほうに」と題する4回のコンサートを開催。進境著しい山田和樹が、大阪4オケを指揮、メンデルス

ゾーンの全交響曲、ヴァイオリン協奏曲、オラトリオ『エリア』その他を演奏。わずか8日の間に、これだけの楽曲を演奏するとは、全く恐れ入った。2025年度主催公演メイン企画「バッハ2025綾なす調和（全6回）」も、ホールの特性を活かし、よく練られたもの。Vol.2に登場、オランダ・バッハ協会でコンサートマスター兼音楽監督を務めた佐藤俊介のヴァイオリンは、期待通り別格であった。

小規模ながら、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールも開館30周年を迎えた。記念公演「偉大なる3人のコンサートマスター（全3回）」は人気が沸騰。3人のコンマス、V.シュトイデ（ウィーン・フィル）、石田泰尚（神奈川フィル&京響）、郷古廉（N響）が、それぞれ個性豊かな演奏を披露した。一方、フェニックス・エヴォリューション・シリーズ112に登場したAKA DUOの松岡井菜（ヴァイオリン）と木口雄人（ピアノ）は、大いに将来が囑望される逸材であった。

最後はオペラ。関西歌劇団が、第105回定期公演においてヴォルフ＝フェッラーリの『イル・カンピエッロ』という珍しい作品を取り上げた。ヴェネツィアを舞台に、ヴェネツィア方言で歌われる美しいメロディーに彩られた作品。また、12月には「2025グランドオペラフェスティバル in Japan（倉敷市）」にて、マスネの『サンドリヨン』を上演。いずれも、オペラ指揮者の道をまっしぐらに歩む牧村邦彦がタクトをとった。

関西二期会は、レハールの喜歌劇『メリー・ウィドー』（第99回オペラ公演）を上演。演技にダンスに、ことのほか工夫を凝らした太田麻衣子の演出が光った。

びわ湖ホールプロデュースオペラは、コルンゴルトの『死の都』を上演。2014年、日本初となる同ホールでの舞台上演時に栗山昌良（2023年没）の行った演出が再現された。

兵庫県立芸術文化センターの「佐渡裕芸術監督プロデュースオペラ2025」は、ワーグナーの『さまよえるオランダ人』であった。20作目となる同プロデュースオペラにおいて、初めてワーグナー作品が舞台にのった。それにしても、7回公演という破格なスケジュールを楽々とやってのける集客力には、改めて驚嘆。じわじわとオペラ熱が広がっているように感じられた次第である。

#### 門田展弥（もんだ・のぶや）

京都市立芸術大学にてオーボエを、大阪教育大学大学院にて作曲を学ぶ。1991年より1年間ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジに留学。月刊『音楽現代』、及び『関西音楽新聞』にコンサート批評等を寄稿。2023年、国際教育学会「館糾賞」を受賞。主要作品：オペラ『OTOHIME』（2015年、英国Hastings管弦楽版初演）、オペラ『業平』（2016年、京都初演）、バレエ『The Crane Wife』（2018年、英国Bexhill-on-Sea初演）、バレエ『安寿と厨子王』（2024年、大阪富田林初演）他